

復興情報発信プロジェクト NOW IS.

被災地以外からは、なかなか知ることができない復興の「いま」を知ってほしいという思いから、宮城県では「復興情報発信プロジェクトNOW IS.」を展開しています。

- 広報紙「NOW IS.」 月1回、エリアごとの復興の「いま」を発信します
- 宮城の「いま」を伝えるポスター・パネル 復興にかける決意や想いを全国に届けます
- みやぎ復興情報ポータルサイト 宮城県の復興情報を伝えます

詳しくは [みやぎ復興情報ポータルサイト](http://www.fukkomiyaagi.jp) で検索 (URL <http://www.fukkomiyaagi.jp>)



SNS「いまを発信！復興みやぎ」のフォローもよろしくお願いします。

Interview

みやぎ復興情報ポータルサイトのブログで、「いわたかれん復興フォト」を毎月連載している岩田華怜さん。1年間、被災地の今を見つめ続けた心境をインタビューしました。

いわた かれん
岩田 華怜

仙台市出身の女優。AKB48を卒業し、被災地の「今」を伝えたいと写真の勉強を始めました。



被災地の感情を写真にこめて。 ありのままの「いま」を伝えたい。

—2017年に写真の勉強をはじめた岩田華怜さん。この1年間、カメラを持って宮城県の沿岸部の市町をまわっていただきました。どんな気持ちで撮影してきましたか。

岩田華怜さん(以下「岩田さん」): 私がここで写真を撮る意味ってなんなのかな、といつも考えながら撮影しました。私だから撮れる写真、私だから書けるブログって何なのかな、って。私は、AKB48の時代から東北のあちこちでお仕事する機会をいただいています。自分は、東北を一番よく知っている女優だと思っていますし、

本当に東北が大好きなんです。だから、そういう「東北って本当にいいところなんだよ」って気持ちが伝わるような写真にしたいと思って撮影しました。

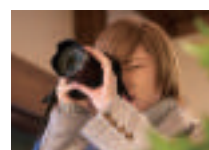
—写真で工夫したところはありますか。

岩田さん: ブログに載せている写真は、一切、色や明るさを加工していません。写真の良さは、偽りない姿を表現できるところだと思うんです。写真を撮り始めたのも「東北の真実を写したい」と思ったからです。露出やアングルが未熟な写真もありますが、私が感じた「ありのまま」を皆

さんにも知っていたきたいと思って。人が住めなくなった家とか、撮っていて切なくなるシーンもありましたが、その時の私の感情が伝わったらいいなと思っています。

—被災地の様子を見たり、現地の方とお話したりして、どう感じましたか。

岩田さん: やはり今も震災当時の姿を残す建物は、印象に残っています。あの時からずっと時間が止まっているモノクロの空間であるように感じました。ガイドの方のお話を聞いて、残すと決めた意志や想いにも感動しました。思い出すのは辛いだろうに、風化させられないという覚悟を感じました。こういうことって、この場に足を運べたからこそ感じられることです。現地の方が魂を込めて頑張っていること、そういう空気感を皆さんに知っていただけたらいいなと思います。



塩竈市の撮影時。お茶を商う「矢部園」さんにて、店主と和やかに話す岩田さん。



岩田さんが撮影した、「高野会館」(南三陸町)内部の写真。

被災地の「いま」を発信する「みやぎ復興情報ポータルサイト」。津波被害のあった沿岸地域を中心に足を運び、記事を作成しました。NOW IS.取材班によるインタビューをはじめ、さまざまな書き手による、多角的な視点で情報を発信しています。

BLOG いわたかれん 復興フォト

これまでの被災地訪問は90回を超える岩田さん。復興の「いま」を切り取った「写真」に想いを込めて、月1回被災地の状況を発信中。親しみやすい文章と自然体な写真で、故郷が元気になっていく姿や宮城のいいところ、おいしいものを綴ります。



自然体で映し出す
復興の呼吸。



地域の復興を願って、野蒜海岸に建立された鳥居。野蒜海岸で海の家を営んでいた方などが中心となってつくった手づくりのもの。(2018年1月上旬撮影)

BLOG PICK UP

「あの日」

2017.07.01更新

「あの日」に取り残されている山元町へ。旧中浜小学校の前には、山元町の復興を願う声や応援メッセージが寄せられた黄色いハンカチが。誰かが誰かのために、誰かの幸せを本気で願うことのあたたかさを思い出すことができました。

震災時、90名の命を守った旧中浜小学校。震災遺構としての保存されます。

地元の学生や地域住民のほか、全国からもメッセージが寄せられている黄色いハンカチ。

執筆者PROFILE
岩田 華怜
仙台市出身の女優。AKB48を卒業し、被災地の「いま」を伝えたいと写真の勉強を始めました。

BLOG NOW IS. 復興 インタビュー



東松島市陸前小野地区で、武田文子さんが中心となって制作している「おのくん」。



亘理町で、町民ボランティア「震災語り部の会ワタリ」設立当初から会長を務める菊池敏夫さん。

被災地で活動する「人」の想いを伝える。

被災地では、復興に向けたさまざまな取り組みが続いている方々が数多くいます。ブログでは、被災地を訪れ、精力的に活動する「人」にじっくりインタビュー。その活動内容、背景にある被災地や復興への想いを伝えています。

BLOG PICK UP

おしか 牡鹿半島食堂いぶき 堀越千世さん

2017.09.04更新

「牡鹿半島食堂いぶき」を営むOPEN JAPAN副代表の堀越千世さんにインタビュー。こだわり抜いたのは、自慢の料理と空間。あたたかみのある古民家の中で、観光客も地元の人も楽しめる場になっています。

「半島の中の人も外の人も受け入れていけるスペースになればいいですね」と笑顔で答える堀越さん。

津波が押し寄せた地域にあった古民家を再生した食堂。店内には津波の跡が残されている。

執筆者PROFILE
NOW IS.取材チーム
今なお復興への道筋を歩む被災地の「現在」と「現実」を伝えるため、日々被災地を巡っています。

BLOG 宮城発！ 元気と食の 最新情報



7年ぶりの開催となった「松島基地航空祭」。ブルーインパルスが青空に美しいアートを描いた。



南三陸町の海の幸を炙り、笹かまぼこの上にのせた「炙り笹」は「及善かまぼこ店」の自慢作。

「食」を中心に被災地の企業・団体の活動を紹介。

被災地企業や団体のさまざまな取り組みを紹介するブログ。宮城のあちこちで芽吹いている、今最も元気なトピックや注目グルメをピックアップしてお届け。被災地域へのおでかけプランを考えるヒントもたくさん詰まっています。

BLOG PICK UP

郷土への想いがこもった “宮城の食”のセレクトショップ

2018.02.10更新

松島町で食に関心の高い観光客を中心に注目を集める、宮城の食のセレクトショップ「M Pantry」。観光客からの意見を元に開発した「カキとコメと」を看板商品に、ご当地の食を感じられる、ほかにはない商品を販売しています。

牡蠣の旨みを凝縮し、パリパリの食感に焼き上げた「カキとコメと」。松島散策のお供に。

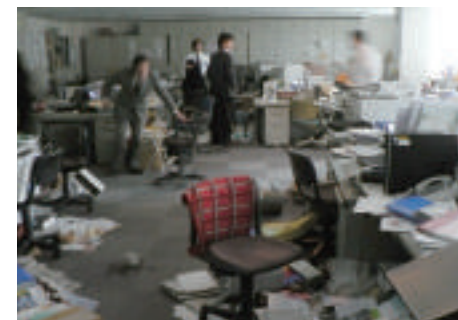
店を切り盛りする鈴木さんご夫妻。被災した町のために自分たちが貢献できることを考え起業。

執筆者PROFILE
一般社団法人IkiZen
震災復興に軸足を置き、被災地の企業の販路開拓や商品開発、広報活動支援などを行っています。

BLOG もう一度 振り返る 私の3.11

宮城県で被災された方、震災直後宮城県の被災地を訪れた方から寄稿いただいた、震災発生当時の記憶をブログで公開。震災当時どこにいて、どう行動し、何を感じたのか。何を教訓とし、どんな風に「いま」につながっているのかを共有します。

石巻市在住の女性が撮影した、流された自宅跡に力強く咲く花。



仙台市在住39歳男性が、地震発生時にいた仙台市中心部のオフィスの様子。重たい机は踊るように揺れ、机にあったパソコンは床下に落下。棚の上にあった物もどんでん落ちてきた。

震災発生当時の記憶と寄稿者の「いま」を綴る。

BLOG PICK UP

ビルの中で

2018.01.24更新

立ってられないほどの、横なのか縦なのか分からないほどの激しい揺れ。一旦止まったが、何をどの順番でやればいいのか判断がつかない。ビルの隣の駐車場には人が広い場所を求め集まり、溢れ始めた。その後の記憶はおぼろげだ。

地震直後のビル内。照明が落ちて薄暗く、いたるところのガラスが割れ、扉が倒れている。

ビルの災害時対応は、避難訓練と全く異なるもの。すぐさま外へ避難するように叫んだ。

執筆者PROFILE
宮城県仙台市在住40代男性
仙台市内の商業ビル9階でイベントの打ち合わせ中、資料を取り出そうと立ち上がった瞬間に被災した。

KEY PERSON

毎月1回11日に発行しているNOW IS.の広報紙では、被災地域を盛り上げていく人へのインタビューを掲載。長年地元で活動してきた人、震災を機にプロジェクトを立ち上げた人など、さまざまな人の声を届けています。

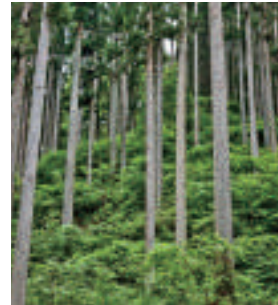


丸平木材株式会社 代表取締役
おのの くにお
小野寺 邦夫 さん

Vol.13 森に携わる者として、南三陸とともに生きる。 in 南三陸

津波に追われて本社裏山に駆け上った小野寺邦夫さんが見たのは、一面の海になった町。けれども振り返って山を見ると、生き生きと茂る木々がありました。

「南三陸で良質な杉が育つのは海のおかげ。潮風や霧が杉に十分な水分を与える。成長した杉が山を守り、山は栄養分豊富な地下水をため込む。その地下水が海の底から湧きだす。全部循環しているんです。何も無いところからの再スタートだからこそ、希望がある。南三陸杉を用いた取り組みを進めながら、革新を試みていきたい」。震災を乗り越えた杉とともに、小野寺さんは歩み続けます。



美しく整えられた南三陸杉の森。

Vol.14 震災前の課題を解決するため、女川に新たな生業を。 in 女川



「あがいん女川」の商品を販売する店舗「あがいんステーション」には、コーヒーショップとコラボしたオリジナル品なども並ぶ。

梅丸新聞店を営むかたわら、「復幸まちづくり女川合同会社」の代表社員として、復興の町を創出し続けている阿部喜英さん。未来のビジョンをつくる中で浮き彫りになった課題が、女川の生業でした。

「水産業が行き詰まると、住み続けられない人が出てしまう。それを避けるための足がかりとして、女川をブランド化しようと考えました」。現在はブランド認定商品の販売や、ブルーリズムにも力を入れています。

「来て食べて買ってという循環によって、雇用も生まれます」。「なんだかおもしろいな、というんな人が集まる町にしていきたいですね」。



梅丸新聞店 代表取締役
復幸まちづくり女川合同会社 代表社員
あべ よしひろ
阿部 喜英 さん



東松島食べる通信 編集長
東松島あんでなしよつぶ まちんど 番頭
おあた まさし
太田 将司 さん

Vol.15 「東松島食べる通信」は、人を紹介する情報誌です。 in 東松島

食の生産者特集した情報誌と、彼らが収穫したり、つくった食べ物がセットで届く「食べる通信」。その「食べ物付き情報誌」の一つ「東松島食べる通信」の編集長を務めるのが太田将司さんです。「僕は東松島市にいる『人』を紹介したいんです。こんなにすごい生産者がいるよって。だから食べ物はおまけみたいなもんです(笑)」。

実は太田さんは千葉県出身。震災後のボランティアがきっかけで移住してから丸6年。今やすっかり「東松島の顔」です。

「東北はこの先も、震災の話題は切り離せない。地元の自慢を笑って話せる媒体をつくってほしいですね」と太田さんは話してくれました。



太田さんが手がける「東松島食べる通信」。



一般社団法人はまのね 代表理事
かめやま たかかず
亀山 貴一 さん

Vol.16 地域課題を可能性に変えて、集落とともに生きる。 in 石巻

亀山貴一さんは生まれも育ちも石巻市牡鹿半島の蛤浜。浜の暮らしを震災によって途切れさせたくない、カフェ「はまぐり堂」を中心に、交流人口の増加を目指しています。

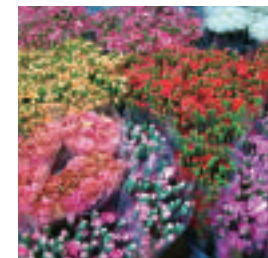
カフェの利用者が年間1万5000人にのぼった一方で、浜の暮らしが変わったと住民の戸惑う声も。その解決策としてたどり着いたのは、地域課題を事業にすること。未利用の山や海の資源、獣害が問題になっている鹿の活用など、里山の資源が循環するプランを描きます。

「地元の方とはこれまで以上にしっかり話をし、ともに進みたい。運良く残された命。だったら地域のためになることや、ワクワクや可能性を事業にしたい」。その想いで、亀山さんは着実に前に進んでいます。



地元の人が戻ってこられる場を、とはじめた「はまぐり堂」。

Vol.17 同業者の助け合いが、震災を乗り越える力になった。 in 名取・岩沼



カーネーションは数千の品種があるといわれています。太田さんもさまざまな品種にトライしています。(平成29年春撮影)

名取市小塚原地区でカーネーション農家を営む太田伸也さん。家業を継ぐ決心をしたのは震災が起きる1カ月前。落ち着くまでは、と会社勤めは続けたものの、震災後2年を待たず専業農家になりました。

「父が他界して家に教えてくれる人がいなかったんですが、頼りになる先輩方がそばにいるから安心なんです」。花き生産組合に加入していたことも助けになりました。「組合の力はすごい。こういうとき、みんなで助け合う仕組みが活きますよね」。

元の場所で再建した太田さんの家のカーネーション用ハウスは、800坪まで回復。昨シーズンの出荷量は30万本にもなりました。「これからは、市場に卸すだけでなく、消費者と直接触れ合い、「買いたい」と思えるカーネーションを作っていきたいです」。



カーネーション農家
おあた しんや
太田 伸也 さん



株式会社シーフーズあかま
アカモクプロジェクト
あかま しゅんすけ
赤間 俊介 さん

Vol.18 漁師の目利きを活かして、海を守る商品を生み出す。 in 塩竈

赤間俊介さんが社長を務める「シーフーズあかま」では、ワカメの養殖のほか、ワカメやメカブ、ギバサなどを使った商品を製造販売。特に力を入れているのがアカモクの活用です。漁や養殖の邪魔になることから漁師には嫌われていたが、実は食物繊維やミネラルが豊富な海藻です。アカモクは一年生の海藻なので、おいしい時期を逃すと固くなる。その見極めが漁師の腕のみせどころだと言います。

赤間さんは「アカモクプロジェクト」を立ち上げ、普及や食育にも取り組み中。「将来的にはアカモクの養殖も視野に入れていきたい。海藻を養殖すると海の循環がよくなり、水質がよくなる。食べてもらうことが地域の自然を守ることにもつながると思っています」。



女性をターゲットに、パッケージやデザインにもこだわった商品。

KEY PERSON

毎月1回11日に発行しているNOW IS.の広報紙では、被災地域を盛り上げていく人へのインタビューを掲載。長年地元で活動してきた人、震災を機にプロジェクトを立ち上げた人など、さまざまな人の声を届けています。



工房地球村
こいずみ たいすけ
小泉 大輔さん

Vol.19で お話を聞きました。 地域の人に利用してもらうことで みんなの心の拠り所に。 in 山元

障害を持つスタッフが元気いっぱい働く「カフェ地球村」。運営するのは、精神障害等により就労が難しい人たちのサポートを行う社会福祉法人 山元町社会福祉協議会「工房地球村」。施設長の小泉大輔さんは「津波で施設利用者さんの仕事なくなりました。心の拠り所がなくなりましたね」と話します。

様々な支援のもと、「地域のみなさんの心の拠り所を」としてカフェが誕生。今では地域住民だけでなく、県内外からもお客さんがやってきます。施設利用者も店員として働くようになってから、地域の方との掛け合いの中でいい変化が起こっているとか。「カフェ地球村」は健常者も障害のある方も共に笑顔になれる場所になっています。



笑顔で接客をする施設スタッフ。ほっこりとした癒しの空間になっています。

Vol.20で お話を聞きました。 大好きな松島のために、 in 松島・利府 今自分たちができることを。

松島でこだわりの日本酒を販売する「むとう屋」の若旦那・佐々木憲作さんは、震災をきっかけに「街づくり」について深く考えるようになりました。そして松島で暮らし、松島を愛する人たちと一緒に「松島流灯会 海の盆」を企画。「自分たちが好きになれるお祭りにしたい。そして、里帰りした人たちが“あ、これが松島だよ”っていえる環境づくりがしたかったんです」。



「酒屋だけ子どもにも来てもらいたい」と、オリジナルサイダーも展開。

「松島は日本三景というところに胡坐をかいてきたところもある。でもこれからの商売は商品よりも人。それは地域にも当てはまる。松島も“あの人がいるから行く”って思われる場所になったら最高ですね」。



むとう屋
ささき けんさく
佐々木 憲作さん



宮城県多賀城高等学校災害科学科1年
わたなべ れいな さとう たく
渡邊 怜那さん 佐藤 岳さん

Vol.21で お話を聞きました。 震災の経験や学校で学んだことを、 in 多賀城 次世代に伝えたい。

平成28年4月、多賀城高校に全国で2例目となる防災系の学科「災害科学科」が開設されました。科学的な視点から防災・減災を考える教育が行われています。

佐藤岳さんと渡邊怜那さんは、災害科学科の1年生。家族や友達に授業のことを話すと、熱心に聞いてくれる人が多いといいます。「災害を経験したことがない子どもたちに、私が経験したことや学んだことを教えたい」と渡邊さん。佐藤さんは「被害を受けた地域に生まれて、こういう高校で学べるのは貴重な経験。地震や防災の知識を身に付け、意識を高めていきたい」と話します。次世代を担う人材として、力強い一歩を踏み出していました。



東日本大震災の津波の跡と約1000年前の貞観津波の跡を、生徒たちが歩いて回り、作成した「多賀城津波伝承まち歩きMAP」。



イラストレーター
さとう じゅんこ
佐藤 ジュンコさん

Vol.22で お話を聞きました。 誰かの思い出を絵にして、 in 仙台 あたたかい気持ちを届けたい。

地下鉄荒井駅に併設した「せんだい3.11メモリアル交流館」にある、カラフルなイラストマップ。交流館を訪れた人が、津波で被災した地域の思い出を付せんを書いて壁にペタッ。それを読み、イラストにするのがイラストレーターの佐藤ジュンコさんです。

「思い出は本当にあったこととずれているかもしれない。過去と今がまざっているかもしれない。でもそういう時間の層が一枚になっているのがこの地図なんです。この場所に誰がいて、何を食べて、どんな生活があって、今どんな営みがあるかということは、伝わりにくい消えやすいこと。でもこの地図を見て、こんな人が暮らしていたんだって身近に感じてもらえたらいいな」と話してくれました。



白いパネルに描かれた巨大なイラストマップ。来場者は思い出を自由に付せんに書いて貼れる。

Vol.23で お話を聞きました。 関わって、住んで、 in 気仙沼 漁師町の力強さを感じてほしい。



地元の中高生に向け、漁師体験や農家体験などを行う「地域協育」のワンシーン。

根岸えまさんは東京から唐桑地区に移住し、「一般社団法人まるオフィス」のメンバーとして、気仙沼市への移住者を増やす取り組みや、地元の中・高校生対象の漁師体験事業を行っています。

さらに、同じく唐桑地区に移住してきた女子たちと一緒に「Pen.turn女子」というグループを結成。古民家をシェアハウスとして活用しながら、唐桑地区のおもしろさを発信しています。「移住するだけでなく、どこにいても気仙沼のために関わってくれる“活動人口”を増やしたい。漁師町ならではの原風景や力強さを、発信していけたらいいなと思っています」。



移住ガールズ「Pen.turn」/
一般社団法人まるオフィス

ねがし
根岸 えまさん



サーフショップリアルサーフ
ぜんま あきお
残間 祥夫さん

Vol.24で お話を聞きました。 サーフィンと海の魅力を、 in 巨理 子どもたちに伝えたい。

39年前に荒浜でサーフィンを始め、現在は荒浜でサーフショップ「リアルサーフ」を営む残間祥夫さん。震災直後は変わり果てた荒浜を見て、もうサーフィンはできないと思ったといいます。しかし震災から2年後、荒浜を再びサーフィンができる海にするために、残間さんはビーチクリーンを再開しました。

「津波はひどい経験でしたが、自然災害は必ずある。常に自分で状況判断して、上手に付き合うしかないでしょうね。最近では、サーフィンをどうやって次世代に伝えようか、と考えている残間さん。「海は上手に付き合えば安全だし、とてもいいものだ」と伝えます。「海は上手に付き合えば安全だし、とてもいいものだ」と伝えます。サーフィンの聖地と言われる荒浜で、残間さんは今日も海と向き合っています。



今は月に5〜7回ほど海に出るという残間さん。現役を貫く姿に憧れるサーファーも多い。